

与論島の漁具漁法

江 幡 恵 吾

鹿児島大学水産学部

要 旨

与論島の漁業の現状について把握するために、与論町漁業協同組合の漁業者に対して、漁具漁法に関する聞き取り調査を行った。与論町漁業協同組合の組合員数は総数307名で、そのうち正組合員が79名、准組合員が228名であった。瀬物一本釣り、底延縄、曳縄、ソデイカ旗流し、タチウオ建縄などの釣漁業が主要な漁法であり、この他にトビウオロープ曳き、追いこみ漁、磯建網、素潜り漁などが行われていた。

最近5カ年の総水揚量は約344～540トンの範囲で、水揚金額は2億3千万円～2億8千万円の範囲で変化していた。水揚数量、水揚金額の9割以上が一本釣り漁業で占められていた。一本釣り漁業で漁獲される数量の約6割が、水揚金額の約5割がソデイカ旗流し漁によって漁獲されるソデイカであった。水揚げされた漁獲物の約3割が与論島内で消費され、約5割が鹿児島に、約1割が沖縄に出荷されていた。

キーワード：漁具、漁法、漁獲量

Fisheries on Yoron Island

EBATA Keigo

Faculty of Fisheries, Kagoshima University

Abstract

An interview with several fishermen was hold, and a state of fishery on Yoron Island was investigated. There are 307 union members of fishermen in Yoron fishery cooperative association. There are mainly the pole and line, the bottom long line, the trolling line on Yoron Island.

The catch of fish has changed between 344 and 540 ton for the last five years. Thirty percent of fish is consume on Yoron Island. Half of the fish landed in Yoron Island are shipped to Kagoshima.

Keywords: fishing gear, fishing method, catch of fish

1. はじめに

与論島における水産業は、地域社会における水産物の安定供給や経済活動に対して重要な位置づけにある。奄美・沖縄地方をはじめとする周辺水域における漁場の環境変化や水産資源の減少、輸入水産物の増大など、水産業を取り巻く環境は年々厳しさを増している。漁業者が安定した生活を送るためには、持続的な漁業生産活動を行える環境整備が急務とされている。そこで、本研究では、与論島で行われている漁業の現状について把握するために、平成15年11月10日～12日に、数名の漁業者に対して聞き取り調査を行った。

2. 与論町漁業協同組合

与論町漁業協同組合では、「組合員が協同して経済活動を行い、漁業の生産能率を上げ、もって組合員の経済的、社会的地位を高めること」を基本目的として、様々な事業が推進されている。購買事業では、適正で良質な漁業資材を供給し、利用者のニーズに応えられるような事業が進められている。製氷冷凍冷蔵事業では、漁船漁業の形態の変化、漁船の大型化、豊漁期の製氷不足などに対応するために、製氷施設の建設を着工し、氷の安定供給が図られている。利用事業では、既存の輸送コンテナの修繕を行い、多様化する出荷形態に対応できるように努められている。指導事業では、サンゴ資源を守るためのオニヒトデやシロイシシガイダマシの駆除、組合員の知識、技術向上のための講習会、漁船保険の加入促進などが行われている。販売事業では、的確な販売体制のために、市場の情報収集やブランド化の確立が図られている。加工事業では、地域水産加工品の定着と与論島ブランドの確立を目指して、衛生管理の徹底と安定供給を基本に、加工品販売店の充実や新商品の開発が進められている。

3. 与論島で行われている漁法

与論島では、瀬物一本釣り、底延縄、曳縄、ソデイカ旗流し、タチウオ建縄などの釣漁業が主要な漁法として行われており、この他にトビウオロープ曳き、追いこみ漁、磯建網、素潜り漁などが行われている。瀬物一本釣りではアオダイ、キンメダイ、アカムツなどが、底延縄ではキンメダイ、ムツ、メダイ、カマスなどが、浮魚礁、中層魚礁などを利用した曳縄ではキハダマグロ、カツオ、シイラなどが漁獲されている。与論町漁業協同組合では、持続的な漁業の存続させるために、次のような禁止漁業、禁漁期間、体長制限などが取り決められている。磯建網漁業は、4月1日から10月31日の間は禁止、二枚網、三枚網の使用を全面禁止、平成16年6月30日まではウニ漁の禁止、追い込み網漁業や建網漁業（網はずしのみ）を除く潜水器漁業の禁止、エビ磯建網の全面禁止、シャコ貝（10cm以下）、

夜光貝（10cm 以下）、サザエ（6cm 以下）の採捕禁止などである。

4. 最近 5 カ年の水揚状況

最近 5 カ年の漁業種別水揚数量と金額の変化を図 1 に示す。

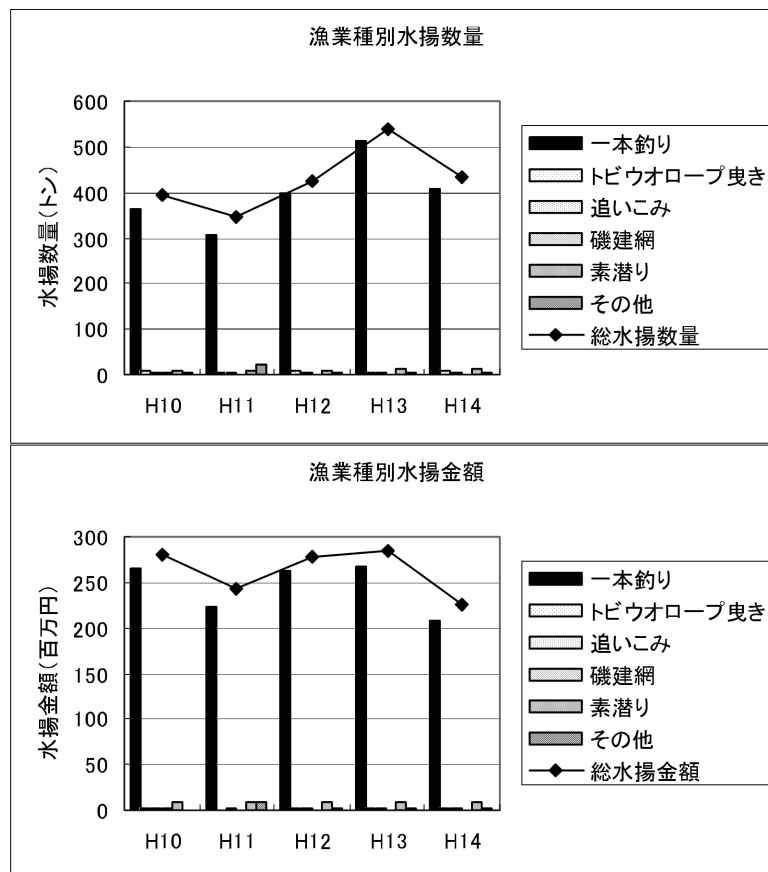


図 1 最近 5 カ年の漁業種別水揚数量と金額の変化

図 1 から、最近 5 カ年の総水揚数量は約 344～540 トンの範囲で、水揚金額は 2 億 3 千万円～2 億 8 千万円の範囲で変化しているのがわかる。総水揚数量、水揚金額の 9 割以上が一本釣り漁業で占められている。平成 14 年度の一本釣り漁業の内訳では、数量の約 61% が、水揚金額の約 47% がソデイカ旗流し漁によって漁獲されるソデイカであり、ソデイカ漁業は与論島の水産業において最も重要な漁業となっている。

5. ソデイカ釣り漁業

ソデイカ(*Thysanoteuthis rhombus*)は、熱帯・亜熱帯海域に生息する外洋性のイカで、外

套背長が 85cm、体重が 20kg 以上にまで成長する食用としては最大のイカである。ソデイカは、凍結をしても風味が変化しにくいために、保存性や流通の面で優れている。ソデイカ釣り漁具の模式図を図 2 に、擬餌針の写真を図 3 に示す。

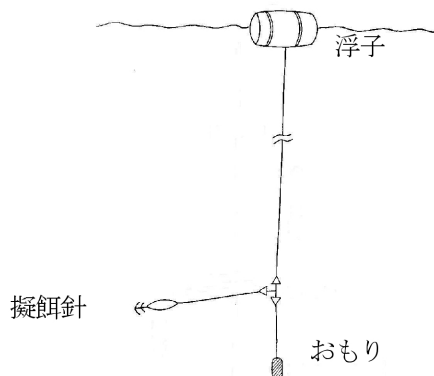


図2 ソデイカ釣り漁具の模式図



図3 擬餌針の写真

漁獲に作用する要因として海底での擬餌針の姿勢が重要とされており、水中を動き、漂うような状況が良いとされている。操業方法としては、擬餌針を取り付けた道糸を浮子に結び、海中に投入する。ソデイカが擬餌針にかかるると浮子が沈むため、漁業者は浮子の動きを確認した後に揚縄する。年々、漁場までの距離が遠くなってきているために、長い場合には1航海で1週間くらいになることもあり、漁業者の負担が大きくなってきている。

6. 水揚げ後の流通

平成 14 年度では、水揚げ数量の約 28%が与論島内で消費されており、これは水揚げ金額の約 31%に相当している。出荷先として最も多いのは鹿児島であり、総水揚げ数量の約 54%、水揚げ金額の約 50%である。この他には、沖縄や奄美大島などに出荷されている。

7. おわりに

与論島における漁業では、一本釣りが主要な漁法となっている。その中でもソデイカ釣り漁業が中心となっており、与論島の水産業の重要な位置を占めている。水揚げされた水産物の約 3 割は、与論島内で消費されるが、それ以外は鹿児島、沖縄などに出荷されている。このような状況で、与論島の水産業が、今後、持続的に発展していくためには、ソデイカの市場価格を安定させることが重要であると考えられる。また、ソデイカ以外の漁獲物の付加価値を高めることや未利用資源の開発をすることも必要と考えられる。